

ブラームスと季節

ブラームスの交響曲第2番は、私が名古屋大学交響楽団の定期演奏会で初めて演奏した思い出の曲である。今から40年以上前のことだ。「思い出の曲」といっても、当時のことはほとんど記憶していないのだが、一つだけ鮮明に覚えていることがある。それは、客演指揮者として来ていただいた伴有雄さんの「ブラームスの交響曲第2番は、6月の演奏会にふさわしい」という言葉だった。そのときの演奏会が6月に開催されたので、伴先生はそうおっしゃったのだろうが、それにしても、なぜ6月なのか、ずっと気になっていた。

ブラームスの音楽の季節感というと、「秋」をイメージする人が多い。音楽評論家の吉田秀和さんは、「ブラームスの音楽というと、まず、私たちの頭に浮かぶのは《秋の思い》であり、ヴィオラやクラリネットの渋い音色である」と書いた（吉田秀和全集第2巻）。作曲家の三枝成彰さんも、「僕はブラームスの音楽を聞くと、いつも秋のイメージにとらわれてしまう。穏やかな春でも、輝くような夏の情景でも、冬の厳しさでもない。どこかセピア色に満ち満ちた森や畑や、深い内省を促すような秋の情景が、彼の音楽からは広がってくる」と書いている（「大作曲家の履歴書」）。

フランソワーズ・サガンの小説「ブラームスはお好き」も、晩秋のパリを舞台にした物語である。主人公ポールは、離婚歴のある39才の女性で、あるとき、14才年下の青年シモンに音楽会に誘われる。そのときのシモンの誘い文句が「ブラームスはお好きですか？」だった。ポールには、長年つきあっているロジェという中年男性がいるが、ロジェにはポールのほかにも若いガールフレンドがいて、ポールは、ロジェと、熱心にポールにアプローチしてくるシモンとの間で心が揺れ動く。因みに、ポールとシモンの14才という年齢差は、ブラームスが一途に愛したクララ・シューマンとブラームスの年齢差と同じである。

この小説をもとにしたフランス・アメリカ合作の映画「さよならをもういちど」では、往年の女優イングリッド・バーグマンがポール役を演じ、ブラームスの交響曲第3番の第3楽章が様々にアレンジされて全編を彩る。この第3楽章のメロディは、ポールたちの揺れる心の内を表しているように聞こえる。

指揮者のサイモン・ラトルは交響曲第3番を「秋の交響曲」と呼んでいる。日本では交響曲第4番をそう呼ぶ人もいる。確かに、これらの交響曲の雰囲気は、春でも夏でも冬でもない。だから秋なのかもしれない。映画「さよならをもういちど」で使われた第3交響曲第3楽章のメロディの音型は、上がって下がるが繰り返される。一方、第4交響曲の冒頭では、下がって上がるが繰り返される。どちらも、けして上がりきらないし、下がりきりもしない。若いころの私は、ブラームスのこういう節回しに、

切なさよりも物足りなさを感じていた。優柔不断で煮え切らない。意気地がなくで満ち足りない。そして、こうしたブラームスの音楽の特徴は、彼のもともとの性格から来ているものと考えていた。

しかし、私も年齢を重ねて、私自身が人生の秋を迎えるに至って、ブラームスの音楽にある「秋」的な感覚、あるいは「秋思」を少しは理解できるようになった。若い頃は、優柔不断で煮え切らなく思っていたブラームスの音楽に、何かもっと深いものを感じるようになった。それは、ブラームスの音楽に対してよく使われる言葉「人生への《諦念》」なのであろうか。

ところが、交響曲第2番は、ここまで述べてきたようなブラームスの音楽のイメージとは、全く異なっている。明るくて、屈託がない。だからであろう、ブラームスの交響曲の中で、この第2番が一番好きだという人はけっこういる。先に紹介した評論家の吉田秀和氏もその一人で、「この曲は、昔から、ぼくがブラームスの音楽の中で最も好きなものの一つでしたが、どうしてこれが好きかと振り返ってみると、ここに、伸び伸びと流れてやまない開放的な明るさ、生き生きとした豊かさを感じていたからだったように思います。」と語る（「ブラームスの音楽と生涯」）。そして、次のように続ける。「ブラームスの大作の中でも、この曲は作られたというより、全体がひとつとして最初から構想されていたという感じのものといってもよいでしょうし、この点でもこの交響曲は特に苦労のあとの著しい第一交響曲とは極度に対立していると思います。」

ブラームスは、人生で四つの交響曲を作曲した。それらの作曲年は、第1番 1876年、第2番 1877年、第3番 1883年、第4番 1885年である。最初の交響曲である第1番は、構想から完成まで、実に20年間を要した難渋の産物であった。それに対して、第2番は、第1番の翌年に完成している。そして、しばらくおいて第3番、その2年後に第4番を完成した。こうした経緯から、実はブラームスは、交響曲を生涯に四つだけ作曲すると初めから決めていて、第1交響曲を完成する以前に、すでに四つの交響曲すべてのラフなスケッチをしていたのではないかという憶測が成り立つ。その証拠に、第4番の完成から彼が没する1897年までは、12年の歳月があったのにもかかわらず、もう交響曲は作曲されなかった。また、四つの交響曲の調性は、順に、ハ短調、ニ長調、ヘ長調、ホ短調であるが、ハ・ニ・ヘ・ホ（ドレミで言えば、ド・レ・ファ・ミ）は、モーツァルトの最後の交響曲第41番「ジュピター」の最終楽章の冒頭に流れる旋律（ジュピター音型）である。その意味では、四つの交響曲は、一つのまとまったセットである。ブラームスは少年時代、音楽教師からモーツァルトやベートーベンの古典をしっかりと教えられていた。

ブラームスの四つの交響曲が初めからまとめて構想されていたかどうかはわから

ないが、少なくとも、第2交響曲が第1交響曲とほぼ同時に構想されたのは間違いないであろう。吉田秀和氏が、第2交響曲のことを「最初から構想されていた」とか「第1交響曲とは極度に対立している」と言っているのも、そのことを意味しているのであろう。ブラームスは、最初の交響曲を作曲するに際して、ベートーベンの交響曲を強く意識した。そのため、作曲に長大な時間がかかった。できあがった交響曲第1番は、重厚・壮麗で、ベートーベンの第10交響曲と呼ばれることもあった。一方で、ブラームスは、第1交響曲を作曲しながら、それとは相容れない、もっと軽やかで伸びやかな感覚を注ぎ込むことのできる別の作品をつくろうと、アイデアを温めていたのであろう。それが、交響曲第2番である。

交響曲第2番は、オーストリア南部にあるヴェルター湖畔のペルチャッハという村で作曲された。ヴェルター湖はアルプスの氷河によってつくられた湖で、冬は湖面が凍るが、夏になると気温が高まり、水温は20度を優に超える。湖畔のペルチャッハは、1864年にウィーンと鉄道で結ばれたのち、湖と山々の美しい風景によって、ウィーン子たちに人気の夏の保養地となった。当時ウィーンに住んでいたブラームスは、1877年の6月にこのペルチャッハを訪れ、あふれる自然を満喫しながら、約2か月という短期間で第2交響曲を書き上げた。「ブラームスの交響曲第2番は6月にふさわしい」というのは、それが6月に作曲されたからであった。

ヨーロッパには梅雨はない。ヴェルター湖畔の6月から7月にかけての季節は、日照時間が長く、暖かいわりに湿度が低い。一年で最もすごしやすく、自然が美しく明るい季節である。日本では、ちょうど5月に当たる。だから、「ブラームスの交響曲第2番は、6月の演奏会にふさわしい」という表現は、日本の季節感でいえば「ブラームスの交響曲第2番は、5月の演奏会にふさわしい」ということになる。

([名古屋大学交響楽団第112回定期演奏会パンフレット](#))